

# 韓国語におけるHigh Applicativeについて\*

萱 嶋 崇

## 概要

日本語と韓国語は非常に多くの共通点を持つ一方で、日本語話者には直感的に理解しづらいデータも観察される。本稿では、(i) 単一の節中に2つの対格名詞句が生じる現象 (Double Accusative Construction) と、(ii) 対格表示された目的語が生起する受動態 (Retained Object Passive Construction) が使役の解釈を持つ現象に焦点を絞る。これら2つの日本語では観察されない現象は、High Applicative という概念を援用することで理論的に捉えられる。High Applicative とは、伝統的にバンツー諸語について想定されてきた項を導入する機能範疇を、Pylkkänen (2008) が分類したうちの1つである。同機能範疇は動詞に意味的に選択されない項を統語派生に導入し、被影響の解釈を与える。Pylkkänen (2008) では High Applicative が日本語や英語、そして韓国語では採用されていないと論じられている。Kayashima (2024) ではこれに対し、日英語において特殊な形で High Applicative が採用されていると想定することで、それぞれの言語の特殊な構文に説明を与えた。本稿では、韓国語でも同様に High Applicative が採用されていると想定することで、先に挙げた2つの現象が捉えられることを示す。

## 1. 考察対象

日本語と韓国語間で相違が観察される現象として、単一の節中に2つの対格名詞句が生じる現象 (Double Accusative Construction) と、同じ形式が使役と受身両方の解釈を持つ現象 (Retained Object Passive Construction) が挙げられる。両現象に共通する特徴は、3つの項が統語構造に含まれていることである。このような場合は Applicative という機能範疇を想定して分析が行われることが多く、同機能範疇に関するこれまでの知見から日韓語の相違点を統一的に説明できる可能性がある。本節ではこれら2つの現象を順に概観

---

\* 本稿の執筆にあたり、熊本県立大学の査読者から大変有意義なコメントを頂いた。ここに謝意を表したい。なお、本稿に残る不備や問題点は全て執筆者に帰するものである。



‘John snapped a picture of Mary’s profile without her knowledge.’

(Yoon (2015: 90))

(2a) と (2b) 共に、外側と内側の名詞句間には所有関係があるにも関わらず、容認度がかなり低い。更に、(2a) の所有関係は譲渡可能、(2b) の所有関係は譲渡不可能であり、所有関係の特性も関係がない。

DAC の成立条件として、Yoon (1989) は Affectedness Condition (以降 AC) を提案した。この条件によれば DAC には、外側の名詞句が文中で表される事象によって何らかの影響を受ける文脈が必要である。(2a) や (2b) では、それぞれ外側の名詞句が影響を受けるということが文脈から予想されづらく、これが容認度の低下に繋がっていると考えられる。一方で、被影響の文脈が明確であれば、例えそれが精神的なものであっても以下のように容認される。

- (3) John-un      Mary-lul      elkwul-ul      ttwulecikey      chyeta.po-ass-ta  
 John-TOP    Mary-ACC    face-ACC      intently      stare-PST-DECL  
 ‘John stared intently at Mary’s face.’  
 (Yoon (2015: 90))

ところで、(1a)、(1b) について日本語と比較すると、外側の名詞句にあたる名詞句は対格表示ができない。

- (4) a. John は Yenghi\* を / の腕を掴んだ。  
 b. John は Yenghi\* を / にプレゼントを贈った。

この対比は、日本語では韓国語に比べ項の導入に関して制限がかかっていることを示している。この日韓語間の相違はどこから生じるのだろうか。

## 1.2. Retained Object Passive Construction

韓国語ではしばしば使役文と受動態との間の相関関係が指摘されており、その要因となっているのが以下のような例である。

- (5) halmeni-ka      sonca-eykey      heli-lul      palp-hi-ess-ta.  
 Grandmother-NOM    grandson-DAT    back-ACC    step on-CAUS/PASS-PAST-DEC  
 a. Grandmother made her grandson walk on her back (to relieve the back pain).  
 b. Grandmother got her back stepped on by her grandson (accidentally, when she was playing with him on the floor.)  
 (Yeon (2015: 129))

(5) は2通りの解釈が可能で、1つは(5a)に示される通り、祖母が孫に背中を踏んでもらったという使役の解釈、もう1つは(5b)に示される通り、祖母が孫に不本意に背中を踏まれてしまったという迷惑の受け身の解釈である。対格表示される目的語が含まれる受動態は **Retained Object Passive Construction** (以下 **ROPC**) と呼ばれ、そのうち一部が(5a)のように使役文の解釈が可能である。

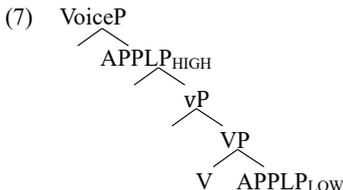
日本語では、(5a)と(5b)に対応する文はそれぞれ以下のようになる。

- (6) a. 祖母が孫に背中を踏ませた。  
 b. 祖母が孫に背中を踏まれた。

(6a) では使役を表す接辞「-させ」、(6b) では受動態を表す接辞「-られ」が用いられている。解釈が異なる以上形式も異なるのは自然に予測されることであるが、韓国語において同じ形式で使役と受動態両方の解釈が可能である事実はどのように捉えられるだろうか。

## 2. 理論的枠組み

本節では、1節で概観した問題点を考えるための理論的枠組みを提示する。DACとROPCに共通する特徴は、内項と外項のほかにもう1つ項が含まれていることである。Marantz (1984) 以降、動詞によって選択され派生に導入されるのは意味上の目的語である内項のみであり、それ以外の項の導入は機能範疇によって行われると考えられている。意味上の主語である外項は、Kratzer (1996) の用語では **Voice**、Chomsky (1995) の用語では **v** によって派生に導入される(本稿では **Voice** の表記を用いる)。内項と外項以外の項を派生に導入する機能範疇として、**Applicative** がある。この機能範疇は Pyllkänen (2008) によれば **High Applicative** (以降 **APPL<sub>HIGH</sub>**) と **Low Applicative** (以降 **APPL<sub>LOW</sub>**) に分類され、それぞれ統語的位置と、解釈に及ぼす影響が異なる。以下(7)はそれぞれの **APPL** の統語位置、(8)、(9)はそれぞれの **APPLP** の具体例である。



(8) High Applicative

- a. Mukasa ya-tambu-le-dde Katonga  
 Mukasa Past-walk-Appl-Past Katonga  
 ‘Mukasa walked for Katonga.’ (Pykkänen 2008: 20)
- b. [VoiceP Mukasa [APPL<sub>HIGH</sub> Katonga [VP]]]

(9) Low Applicative

- a. I wrote John a letter. (Pykkänen 2008: 14)
- b. [VoiceP I [VP V [APPL<sub>LOW</sub> John [APPL<sub>LOW</sub> APPL<sub>LOW</sub> a letter]]]]]

(7) に示してある通り、APPL<sub>HIGH</sub> は Voice に選択される形で投射し、これにより派生に導入された名詞句は被影響の解釈を得る。一方 APPL<sub>LOW</sub> は V の補部として投射し、指定部と補部の名詞句の間に所有関係が成り立つ。(8a) は具体的な High Applicative の例で、用いられている動詞は 1 項動詞の *tambu* ‘walk’ であり、この動詞の項として派生に導入されているのは行為者の *Mukasa* である。動詞には APPL<sub>HIGH</sub> を表す接辞 *le* が付加しており、これにより *Katonga* が派生に導入されている。APPL<sub>HIGH</sub> によって派生に導入された項は被影響の解釈を受け、文全体は「Mukasa が Katonga のために歩いた」という意味になる。一方で (9b) は Low Applicative の例であり、APPL<sub>LOW</sub> の指定部－補部の関係によって、*John* と *a letter* の所有関係が含意される。この結果 (9a) は「私は John に手紙を書いた」という解釈になる。

Pykkänen (2008) では、日英語共に High Applicative は採用されていないと論じられている。これに対し Kayashima (2024) は、両言語では主題関係を構築する領域が繰り返し生成されることによって、High Applicative を使用した構文が派生されると主張した。具体的な統語構造を (10) に示す。便宜上、統語構造上下位の主題領域を Lower Thematic Domain (以降 LTD)、上位の主題領域を Higher Thematic Domain (以降 HTD) と呼称する。

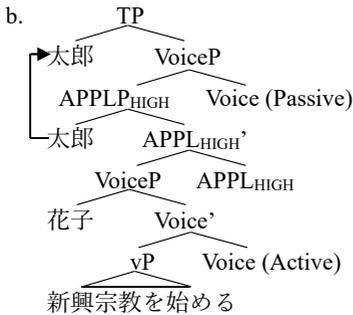
- (10) [VoiceP [APPL<sub>HIGH</sub> [VoiceP [vP [VP V APPL<sub>LOW</sub>]]]]] (Kayashima 2024: 70)
- HTD
LTD

LTD は、一般的に想定される TP 以下の統語構造と相違ない。通常の文はこの LTD のみが生起し、T が LTD を選択して派生が続き、HTD は生起しない。日英語において内項と外項以外が派生に導入される時、HTD が LTD の上に生起する。HTD と LTD は VoiceP と APPL の階層性については同じである

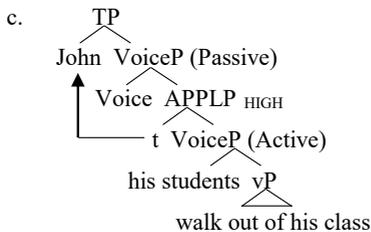
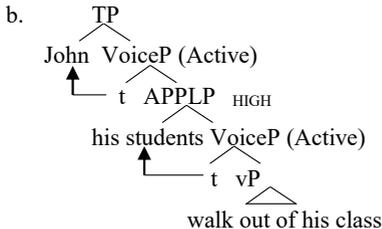
が、HTDは動詞的な要素(vPとVP)を含まないという点で異なる。またHTDのVoice主要部とAPPL<sub>HIGH</sub>主要部は、日本語では受動態の接辞-られ、英語では*have*として顕在化すると想定する。

具体的には、(10)の統語構造で日本語では間接受動態、英語ではHave構文が派生し、それぞれ以下のように図示される。

- (11) a. 太郎が花子に新興宗教を始められた。



- (12) a. John had his students walk out of his class.



(Kayashima 2024: 74-75)

(11)のLTDでは、「花子が新興宗教を始める」という事象が表される。HTDのAPPL<sub>HIGH</sub>により太郎が派生に導入され、LTDで表される事象に影

響を受ける解釈が保証される。HTDのVoiceは受動態であり、接辞「-られ」として音形化する。受動態であるが故に項の導入は行われず、「太郎」が主語位置に移動する。最終的には「花子が新興宗教を始めることで、太郎が影響を受けた」といった迷惑の受け身の解釈になる。

(12a)は2通りの解釈が可能で、1つは「Johnが学生に教室を出ていかせた」という使役の解釈、もう1つは「Johnが学生に教室を出ていかれた」という受身の解釈である。前者が(12b)、後者が(12c)の統語構造を持つ。(12b)のLTDでは「学生が教室を出ていく」という事象が表されている。*his students*はHTDのAPPL<sub>HIGH</sub>指定部に移動し、被影響の解釈を得る。HTDのVoiceは能動態であり、*John*が派生に導入される。その結果文全体は「Johnにより学生が影響を受け、教室を出て行った」という使役の解釈になる。(12c)のLTDは(12b)と同じく、「学生が教室を出ていく」という事象を表している。(12b)との相違点はHTDのVoiceが受動態であり、*John*がAPPL<sub>HIGH</sub>指定部に導入され主語位置まで移動していることである。<sup>2</sup>これにより文全体は「学生が教室を出ていくという事象によってJohnが影響を受けた」という受身の解釈になる。(12b)と(12c)のHTDはどちらも、Voiceが能動態であるか受動態であるかに関係なく*have*として顕在化する。

Pykkänen (2008)では日英語同様、韓国語でもHigh Applicativeは採用されていないと論じられている。次節では、High Applicativeを韓国語に想定することによって1節で概観した問題点を捉えられることを示す。

### 3. 分析

#### 3.1. DAC

DACについては、Tomioka and Shim (2007)が洞察に富んだ分析を行っている。同分析によれば、DACには目に見えない動詞*affect*が含まれており、外側の名詞句はこの動詞に選択されることで対格表示されている。



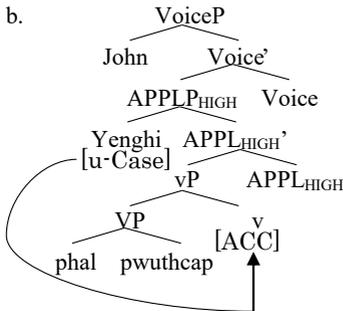
2 被影響の解釈が外的併合と内的併合に関係なく付与されることは、Chomsky (2021)のDuality of Semanticsに反しているように思われる。Kayashima (2024)はこの理論的問題について、被影響という意味的な要素の本質を精査することで説明を与えている。

(13) に示されるように、DAC における *possessor* (所有者) つまり外側の名詞句は、非顕在的な動詞 *affect* と指定部-主要部関係にあり、*possessee* (被所有者) つまり内側の名詞句は、動詞の補部として生起する。これら2つの名詞句はそれぞれの動詞から対格の値を与えられると Tomioka and Shim (2007) は主張する。

この分析であれば、DAC が AC を満たさなくてはならないことが捉えられる。同構文で観察される所有関係は、AC を満たすための必要条件である。被所有者に何らかの行為を加えられれば、所有者は物理的あるいは精神的な影響を被ることになるからである。

ところで、Tomioka and Shim (2007) の洞察は、*High Applicative* という既存の想定を援用することで、非顕在的な動詞の存在を想定することなく捉え直すことができる。韓国語が *High Applicative* を採用していて、DAC において外側の名詞句が  $APPL_{HIGH}$  指定部に導入されていると考えれば、AC が観察されることが自然に捉えられる。

- (14) a. John-un Yenghi-lul/-uy phal-ul pwuthcap-ass-ta. (= (1a))  
 John-TOP Yenghi-ACC/-GEN arm-ACC grab-PST-DECL  
 ‘John grabbed Yenghi by the arm.’



(14) では  $APPL_{HIGH}$  が *VoiceP* と *vP* の間に生起しており、Pylkkänen (2008) の一般化に従っている。*Yenghi* はこの  $APPL_{HIGH}$  指定部に導入されることにより被影響の解釈を得る。残る重要な問題は、対格の付与がどのように行われているかである。 $APPL_{HIGH}$  主要部が対格の値を与えると想定することも考えられるが、通言語的な根拠がない余剰な想定となってしまうため好ましくない。この問題は、Bošković (2007) の格付値システムを採用することで解決可能である。同システムでは、解釈不可能な格素性が探査子となり、格

の値を決定する主要部のうち最も統語的距離が近いものに応じて値が決定される。これに従えば、(14b)において *Yenghi* の [u-Case] は一般的に対格の値を与えると想定されている他動詞の *v* から値を与えられることになる。(1b)のタイプについても、(14b)と同様の統語構造によって格の分布が捉えられる。このように、Pylkkänen (2008) の High Applicative、Bošković (2007) の格付値システムを援用することで、追加の想定を行うことなく韓国語の DAC は捉えられる。

ところで、以下に再掲する (4) で確認した日本語との相違、つまり日本語の方が項の導入について制限がかかる事実は、本枠組みでは (15) のように捉え直される。

- (4) a. John は *Yenghi*\* を / の腕を掴んだ。  
 b. John は *Yenghi*\* を / にプレゼントを贈った。

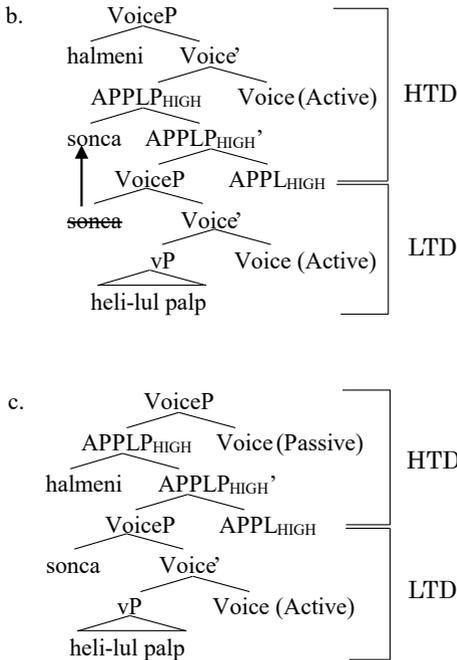
- (15) 韓国語は Pylkkänen (2008) が定義する High Applicative を持つ一方で、日本語は持たない。

つまり韓国語は使用される動詞に制限があるものの、Pylkkänen (2008) の主張に反し、バンツー諸語と同様の振る舞いをするということである。一方で日本語は Pylkkänen (2008) の主張通り、High Applicative についてバンツー諸語と同様の用法は許されない。

### 3.2. ROPC

使役の解釈を併せ持つ ROPC については、Kayashima (2024) の分析をそのまま適用できる。(10) の想定を用いると、以下に再掲する (5) の統語構造は以下ようになる。

- (16) a. halmeni-ka      sonca-eykey      heli-lul      palp-hi-ess-ta. (= (5))  
 Grandmother-NOM   grandson-DAT   back-ACC   step on-CAUS/PASS-PAST-DEC



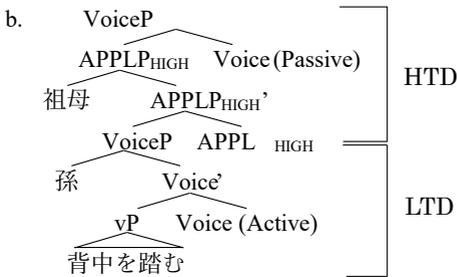
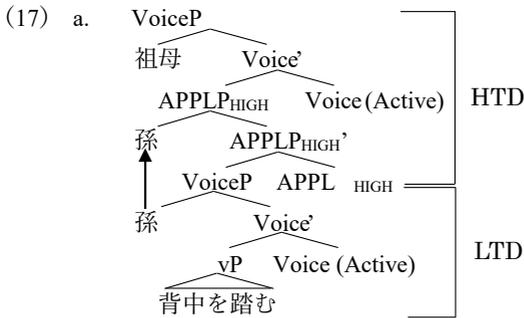
(16b) の LTD では、「孫が背中を踏む」という事象が表されている。*sonca* は HTD の  $APPLP_{HIGH}$  指定部に移動し、被影響の解釈を得る。HTD の VoiceP は能動態であり、*halmeni* が派生に導入される。結果文全体は「孫が祖母の影響を受けて背中を踏んだ」という使役の解釈になる。(16c) の LTD は (16b) と同じであるが、HTD の  $APPLP_{HIGH}$  指定部には *halmeni* が導入される。HTD の VoiceP は受動態で項は導入されず、DP1 がそのまま主語位置に移動する。その結果文全体は「祖母が、孫が背中を踏むという事象によって影響を受けた」という受益の解釈になる。重要なことに、HTD の音形化について、韓国語では Voice が能動態であろうと受動態であろうと、同じ形の *-hi* として顕在化する。これは (12) で見たように、英語の Have 構文における HTD の音形化と同様である。

以下に再掲するように、日本語では使役文と受動態は異なる接辞が使用される。

(6) a. 祖母が孫に背中を踏ませた。

b. 祖母が孫に背中を踏まれた。

それぞれ使用される接辞は異なるものの、(6a)、(6b) の統語構造は、(16b)、(16c) と同様に想定することができる。



(17a)と(17b)がそれぞれどのように使役文と受動態の解釈を得るかは、(16b)と(16c)の場合と同様である。唯一の違いはHTDが、Voiceが能動態であれば「-させ」、Voiceが受動態であれば「-られ」として顕在化することである。このように、ROPCにまつわる日韓語間の違いは、HTDにおけるVoiceの音形化の違いから生じると考えられる。<sup>3</sup>

#### 4. まとめと今後の課題

本稿では、韓国語がHigh Applicativeを採用していると想定することで、

3 査読者から指摘があったように、HTDにおけるVoiceが音形化に影響するかがどのように決まるかは重要な問題である。(10)の構造を仮定してより多くの言語について調査し、今後明らかにしたい。

DAC や ROPC に使役の解釈が生じる現象を捉えられることを示した。DAC では Pylkkänen (2008) の一般化通り、Voice に選択される形で APPL<sub>HIGH</sub> が投射し、その指定部に外側の名詞句が導入される。外側の名詞句が対格表示される事実は、Bošković (2007) の格付値システムを援用することで捉えられる。この High Applicative の採用が、日本語よりも自由な項の生起を可能にしている。ROPC は日本語の間接受動態、英語の HAVE 構文同様 LTD の上に HTD が生起することで派生され、HTD の APPL<sub>HIGH</sub> 指定部に併合する名詞句によって使役文と受動態の解釈が生じる。韓国語の HTD は英語と同様 Voice の態に関係なく音形が同一である特徴があり、「-させ」、「-られ」と異なる接辞を用いる日本語と差異が生じる。

本稿では可能な限り High Applicative の存在可能性を追究したが、日本語と韓国語、そして英語では、バンツー諸語と同じようには High Applicative を自由に使用できない。Pylkkänen (2008) が High Applicative が存在すると主張した言語では、非能格動詞や状態動詞を含む統語構造にも APPL<sub>HIGH</sub> が生起可能だが、日本語と韓国語、そして英語では生起できない。この制約がどこから生じているのか、言語を比較しつつ追究する必要がある。また韓国語において ROPC が使役の解釈も併せ持つ例は少ない。英語の Have 構文と比較しつつ、どの動詞を使用し、どのような文脈で成立するのか、量的研究を行う必要がある。

#### 参考文献

- Bošković, Željko (2007) "On the Locality and Motivation of Move and Agree: An Even More Minimalist Theory," *Linguistic Inquiry* 38, 589-644.
- Cho, Sungeun (2003) "A Conditioning Factor in Possessor Agreement Constructions," *Japanese / Korean Linguistics* 11, ed. by Pat Clancy, 343-351, CSLI Publications, Stanford, California.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (2021) "Where Are We Now, and Where Can We Hope to Go," *Gengo Kenkyu*, 1-41.
- Chun, Sun-Ae (1985) "Possessor Ascension for Multiple Case Sentences," *Harvard Studies in Korean Linguistics* 1, ed. by Susumu Kuno et al, 30-39, Hanshin Publishing, Seoul.
- Kayashima, Takashi (2024) "Applicative Constructions in English and Japanese," *English Language and Linguistics* 30-3, 63-82.
- Kratzer, Angelica (1996) "Severing the External Argument from Its Verb," *Phrase Structure and the Lexicon*, ed. by Johan Rooryck and Laurie Zaring, Kluwer, Dordrecht.
- Marantz, Alec (1984) *On the Nature of Grammatical Relations*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

- Pylkkänen, Liina (2008) *Introducing Arguments*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Tomioka, Satoshi and Chang-Yong Sim (2007) “The Event Semantic Root of Inalienable Possession,” Unpublished Ms, University of Delaware.
- Yeon, Jaehoon (2015) “Passives,” *The Handbook of Korean Linguistics*, ed. by Lucien Brown and Jae Hoon Yeon, 116-136, Wiley-Blackwell, London.
- Yoon, James Hye-Suk (1989) “The Grammar of Inalienable Possession Constructions in Korean, Mandarin, and French,” *Harvard Studies in Korean Linguistics III*, 357-368.
- Yoon, James Hye-Suk (2015) “Double Nominative and Double Accusative Constructions,” *The Handbook of Korean Linguistics*, ed. by Lucien Brown and Jae Hoon Yeon, 79-97, Wiley-Blackwell, London.